

## 卒業論文

# 竹刀職人と、その伝統・技術を守るために

慶應義塾大学経済学部 4 年

大沼あゆみ研究会 1 3 期

学籍番号：2 1 3 2 2 7 1 1

丸山哲平

### -要旨-

みなさんは竹刀職人という方々の存在を知っているでしょうか。剣道を嗜んでいるものですら、その存在を知らない人々は少なくないだろう。彼らは剣道という武道が生まれた当初から、自らの腕と数少ない道具で剣道には欠かせない竹刀を生み出してきた。しかし、かつては数多く存在した竹刀職人も現役で続けておられる方は僅か 10 名ほどで、後継者となる弟子を持つ方も多くないという。このような現状に陥ってしまった主な理由は、海外産・機械製竹刀の流通にある。このような状況でいかにして竹刀職人の伝統と技術を、そして彼ら自身を守っていくことができるのか、経済的な視点で考察を進めていきたい。

一理に達すれば万法に通ず。

宮本武蔵

# 目次

## 序章

### 第一章 竹刀

- 1-1. 竹刀とは
- 1-2. 竹刀に用いられる竹の種類
- 1-3. 手作りと機械製、国産と海外産

### 第二章 竹刀職人

- 2-1. 竹刀職人とその歴史
- 2-2. 誇りとこだわり

### 第三章 竹刀職人が抱える問題

- 3-1. 収益性の低下
- 3-2. 後継者の不足

### 第四章 現状の対策及び問題意識

- 4-1. 全日本武道具協同組合とその対策
- 4-2. 問題意識

### 第五章 政策提言

- 5-1. 海外産機械製竹刀と手作り竹刀の比較
- 5-2. 手作り竹刀が機械製竹刀を価格面で凌ぐ可能性
- 5-3. 広報活動
- 5-4. アンケートを通じた政策の有効性の検証

## 終章

## 参考文献

## あとがき

## 序章

みなさんは竹刀職人という方々の存在を知っているであろうか。剣道を嗜んでいるものですら、その存在を知らない人々は少なくないだろう。彼らは剣道という武道が生まれた当初から、自らの腕と数少ない道具で剣道には欠かせない竹刀を生み出してきた。しかし、かつては数多く存在した竹刀職人も現役で続けておられる方は僅か10名ほどで、後継者となる弟子を持つ方も多くないという。

このような現状に陥ってしまった要因は様々である。しかしその中でも大きな要因の一つが、海外産・機械製竹刀の流通にある。人の手で一本一本作る竹刀に比べて品質は劣るものの、安価に提供できる海外産の竹を用いて機械で作った竹刀には確かな需要があった。それに対して職人が一日に作ることのできる竹刀は多くても三本程度である。そこから生活に必要な費用を得るためには価格を高くせざるを得ず、こだわりをもった剣士以外の竹刀需要を機械製竹刀に奪われている。すると、弟子を育てるために割く時間が惜しくなり募集を停止してしまう職人も出てくる。その一方で竹刀職人への収益面での魅力も低下しており、そもそも弟子入りを希望するものも減少してしまう。すると竹刀職人の数はどんどん減少していき、段々と機械製の竹刀がスタンダードになっていく。実際に現在流通している竹刀の99%以上が機械製であり、手作りの竹刀は1%にも満たないと言われている。このような状況で、機械製の竹刀しか使ったことがない、そもそも職人の存在を知らない若者の剣士もいる。そこから竹刀職人を志す者が生まれる可能性は著しく低い。紛れもない伝統と技術で剣道という武道を支えてきたにもかかわらず、彼らの存在が剣道の経験がある者にすら明確に認知されていないというのは非常に悲しい現実である。

以上が竹刀職人を取り巻く現状となっている。それに加えて少子高齢化に伴い、剣道人口そのものも減少の一途をたどっており剣道界全体が厳しい状況にある。本論文では、このような状況でいかにして竹刀職人の伝統と技術を、そして彼ら自身を守っていくことができるのか、経済的な視点で考察を進めていく。具体的には、まず竹刀そのものや竹刀職人について聞き取り調査等を通じて詳しく理解したい。その上で現在竹刀職人の方々を取り巻く厳しい状況の原因を明らかにして、それに対する打開策を示していきたい。

## 第一章 竹刀

本章では、竹刀そのものとその様々な種類について説明していく。

### 1-1. 竹刀とは

竹刀は、剣道で用いられる竹で作られた日本刀の模造品である。縦に6~8つに分割された竹片のうちの4つを組み合わせて作られている。先端や持ち手などの部分は革で覆われ、それぞれ先革、柄と呼ばれる。また竹片の中心部も革で止められており、これは中結と呼ばれる。4つの竹片のうち1つの先から柄に至るまで、「つる」と呼ばれる一本の弦が張られており、この弦が張られた側を峰、その反対側を刃、左右の2片を鐙に見立てている。

### 1-2. 竹刀に用いられる竹の種類

竹刀にするための竹には、適切な堅さなどが求められる。そのため、現在竹刀に使われている竹の種類は下記の2つである。

#### ① 真竹

イネ科イネ目タケ亜科マダケ属マダケの植物。日本や中国、台湾などにも生息している。繊維が細く、肉厚で弾力性に富むことから竹刀に用いる際には高品質な品種として認識されている。

#### ② 桂竹

イネ科イネ目タケ亜科マダケ属常緑タケ類の植物。台湾や中国の一部に生息しており、マダケとよく似ていることから「タイワンマダケ(台湾真竹)」と呼ばれることもある。しかし、竹刀として用いる際には真竹に比べて繊維が太く、肉薄で弾力性に乏しいため、品質はそれほど高くはないとされている。

### 1-3. 手作り と 機械製、国内産 と 海外産

1-2で説明したように、竹刀に用いられる竹の種類は真竹と桂竹の二つである。ではそれぞれの竹を使った竹刀の作り方は何種類あるだろうか。それは職人による手作り と、機械製の二つである。そして職人による手作りは国内で、機械による生産は海外で行われていると考えてよい。つまり、手作り=国内産 と 機械製=海外産の二つである。ここでは、それぞれについて詳しく説明していきたい。

#### ① 手作り=国内産

職人の方によって多少の違いはあるが、基本的に以下の過程を経て生産される。<sup>1</sup>

#### I.竹の調達

調達時期は12月～1月の真冬。すでに伐採されたものを仕入れることもあるが、主に自分で竹林へと入り、自分の目で竹の状態を確かめ竹を伐採する。

#### II.乾燥

陰干しをしながら水気を抜く。乾きすぎてしまうと割れやすくなってしまうので湿度も管理する必要がある。短くとも一年間は寝かせる。

#### III.素材の選別

一本の竹を縦に6～8枚に割る。竹の繊維や節、重さや堅さを見ながら、どの竹片を組み合わせて竹刀を作るのかを決める。

#### IV.矯めを作る

選んだ4枚の竹片を隙間なく組み合わせるために竹片を炙り、真っすぐにしていく作業。ここで竹刀の形が大まかに決まっていく。

#### V.削り

竹の繊維に沿うように、竹片を1枚1枚見ながら何段階にもわたって削っていく。

#### VI.磨き

光沢が出るように、丁寧に磨いていく。鮫肌を使うこともあるそうだ。

#### VII.結束

糸や金具を四枚の竹片を一つにしていく作業。

#### VIII.完成

先革や中結、柄などを付けて完成。

ざっと見ただけでもこれだけ多くの工程を経て手作りの竹刀は作られているのである。熟練の職人でも一日に約九時間作業し続けて、2、3本しか作れないというのも頷ける話である。もちろん品質は申し分ないが、その分値が張ってしまうことになる。しかし、職人の方から購入した竹刀は故障しても職人の元へと持っていけば安い値段で修理してくれることが多い。

#### ② 機械製＝海外産

基本的な生産プロセスは手作り＝国内産と変わらない。しかし、「I.竹の調達」段階で一本一本竹の状態を見たり、「V.削り」の時に竹片の繊維を気にしたりすることがほとんどない。職人に比べて機械は削るスピードが速いので多くの竹刀を生産できるが、仕入れる竹の品質が低かったり削り方が荒かったりするため、完成品の竹刀の品質も自ずと低くなる。しかし、その分安価に提供できるという強みを持っている。こちらの竹刀も剣道具

---

<sup>1</sup> 江戸川防具 HP 製作工程

([http://www.edogawa-bougu.com/manuf/frame\\_manufacture.html](http://www.edogawa-bougu.com/manuf/frame_manufacture.html))

用品店に持って行くことで修理は可能であるが、職人の方が自分で作った竹刀を修理するのと、機械で作った竹刀を剣道具用品店の方が修理するのではやはり修理の幅が異なる。

## 第二章 竹刀職人

本章では、これまでも話に出てきた竹刀職人の方々について詳しく説明していく。

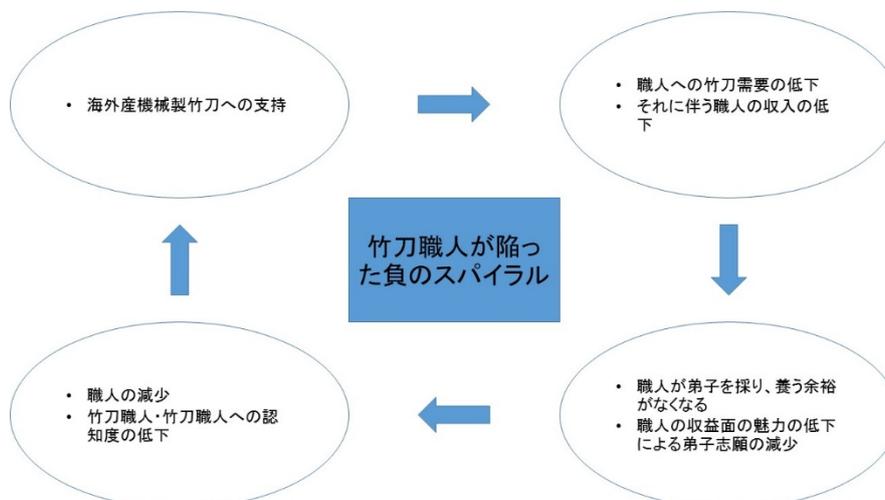
### 2-1. 竹刀職人とその歴史

竹刀職人とは文字通り、竹刀を作る職人のことである。剣道という武道が生まれた当初は全ての竹刀の製作は彼らによって国産の真竹を使って行われ、伝統的に充足してきた。しかし、昭和30年代に国産竹材に異変があり、その生産は激減してしまった。そこで原料を台湾の桂竹に求め、竹刀業者の手で製品化・輸入が進められたのである。以後、台湾を中心とした海外から桂竹を仕入れ、それらの加工を中国で機械によって行い、輸入する方式がスタンダードとなっていった。国内で伐採された真竹ですら一度中国に輸出された後、加工されて再び日本へと輸入されるようになったのである。

その後も品質は劣るものの安価に、安定的に竹刀を供給できるこの方式は支持され、国産竹材が回復しても職人への竹刀需要は減少していった。ここから竹刀職人が陥ることとなる負のスパイラルについて説明したい。

- ① 以上で述べた、海外産機械製竹刀の支持
- ② 職人への竹刀需要の低下、それに伴う職人の収入の低下
- ③ 後継者となる弟子を養う余裕のある職人の減少、職人への収入面での魅力が低下したことによる弟子志願者の低下
- ④ 職人の減少、手作り竹刀・竹刀職人への認知度の低下
- ① 手作り竹刀を使ったことがない若者剣士への海外産機械製竹刀への愛着、それによる更なる海外産機械製竹刀への支持

といった具合である。(図1参照)



(図1 竹刀職人が陥った負のスパイラル：筆者作成)

## 2-2. 誇りとこだわり

2-1で説明したように、厳しい状況へと陥ってしまった竹刀職人であるが、彼らの作った高品質の竹刀を求め続けた剣士が存在し続けていることも確固たる事実である。ここではそのような一部の剣士を魅了し続ける竹刀を作る彼らの誇りとこだわりを紹介したい。

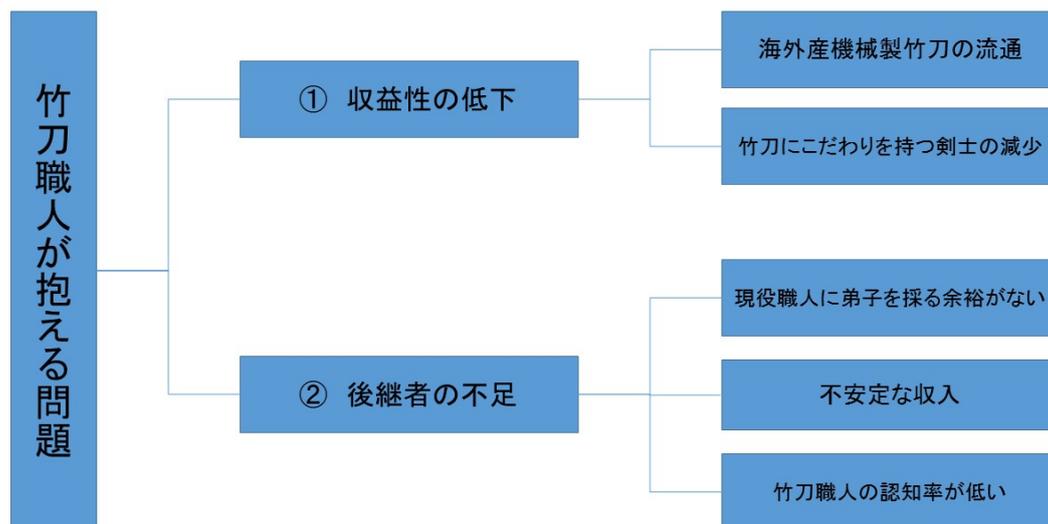
私は実際に竹刀職人の方の元へ伺いヒアリングをさせて頂いた。その方の手はとても大きく、独特のしわがあり、何十年にもわたって竹刀を作ってきた苦勞と熟練の技術を物語っていた。最近では竹刀にかかわらず剣道用品全般でも通信販売がかなり一般的になっている。便利に買い物ができるのはこの上ないことであるが、職人の方々は実際に商品を見ずに剣道具を購入してしまう剣士を見て悲しんでいる。特に竹刀は太さや柄の長さなど、好みは様々で、実際にいくつかの竹刀をもって構えてみたり、何度か振ってみたりしてどの竹刀を購入するのか決めるのが本来の姿である。もちろん竹刀を購入してもらい、その代金を得ることができれば経済的には助かる。しかし、自分の何十年にも渡って身に着けた技術で作った竹刀はこだわりをもった剣士に実際に手に取って選んでほしい、というのが職人の方々の本音である。

ところが通信販売が普及した現代、高段者でもネットで剣道具を購入する者がいる。また形になっていれば安いものの方が良い、と考える者も多い。上にも述べたように職人の方々はこのような姿勢の剣士がいることを悲しんでいる。「最近の剣士は昔よりもこだわりがなく、職人としても張り合いがない。やっても面白味がない。」と感じる職人の方もいるようだ。このような状況でネット通販はもちろん、卸売りをやめて小売りに絞ってしまう方もいる。竹刀需要を海外産機械製竹刀に奪われている厳しい現状で、販売チャネルを減らしてしまうことは普通であれば考えづらい。その上、彼らは自分が作った竹刀の在庫が貯まったとしても、それらの竹刀の価格をいわずらに海外産機械製竹刀より安くしたりすることはない。安いからという理由のみで寄って来る消費者を彼らは求めていないし、それだけ職人としての技術や伝統に自信を持っているのである。

このような一見経済学からすると考えづらいスタイルを貫く彼らの姿を見て、確かな技術に裏打ちされた誇りとこだわりを感じずにはいられなかった。そしてその一方で実際にそんな彼らの作る作品に魅力を感じて、わざわざ他県から訪れて竹刀を購入していく、職人たちに張り合いを感じさせる剣士もれっきとして存在するのである。

### 第三章 竹刀職人が抱える問題

第二章で説明した竹刀職人が抱えている問題を体系的に整理すると以下の図 2 のようになる。ここでは①収益性の低下、②後継者の不足について詳しく見ていく。



(図 2 竹刀職人が抱える問題：筆者作成)

#### 3-1. 収益性の低下

竹刀職人が抱えている問題の一つが収益性の低下である。この問題を引き起こす要因としてⅠ.海外産機械製竹刀の流通、とⅡ.竹刀にこだわりを持つ剣士の減少、が考えられる。

##### Ⅰ.海外産機械製竹刀の流通

これまでも述べてきたように、職人への竹刀需要を奪ってしまったのが海外産機械製竹刀の存在である。海外産の桂竹を用いたこの竹刀は、一時的に国内竹材の異変による竹刀の原料不足を解消した。しかし国内竹材が回復した後もその安さや、安定的な供給が可能な点が支持され、生産は拡大を続けた。ただでさえ少子高齢化によって剣道人口が減少しているにもかかわらず、その上に竹刀需要の大部分を海外産機械製竹刀に奪われてしまった結果、竹刀職人の収益は減少してしまったのである。

##### Ⅱ.竹刀にこだわりを持つ剣士の減少

海外産機械製竹刀の流通の他に、竹刀職人の収益性の低下につながったと考えられるのが、竹刀にこだわりを持つ剣士の減少である。その要因は主に二つである。

一つが、品質よりも安さを重視する剣士が生まれたことにある。これまでは職人が手作りで製作した竹刀しか知らなかった剣士たちが、国産竹材の異変の影響によって生まれた海外産機械製竹刀を手にする事となった。手作りの竹刀に比べて品質が劣るとはいえ、それらの竹刀も様々な要件や基準を満たしており、競技を行う上では何の問題もない。手作りの竹刀と機械製の竹刀、どちらも経験した剣士は二手に分かれたのである。それが品質を重視する者と、安さを重視する者である。品質を重視する者は国内竹材が回復した後は手作り竹刀へと戻っていったが、安さを重視する者はその後も海外産の竹刀を使い続けた。つまり職人の方々からすると安さを重視する剣士は「こだわりを持たない剣士」に当たり、彼らの存在が職人の方々を収益面で苦しめたのである。

海外産機械製竹刀が生産を拡大させ、現在流通する竹刀の9割以上を占めている状況からすると、「こだわりを持たない剣士」はかなりの割合でいたことが予想できる。なぜそれだけの剣士が品質より安さを重視してしまうのか、ここに竹刀にこだわりを持つ剣士が減少した二つ目の要因がある。それは剣道という競技にプロが存在しないことである。剣道のトップ選手の多くは警察官であり、次いで教員や実業団に所属する会社員、そして学生という状況である。剣道の大会の中で最も権威のある大会の一つとされる全日本剣道選手権大会の出場選手を職業別に見てみよう。<sup>2</sup>(下記図3参照)

(職業)	第64回	第63回	第62回	第61回	第60回
警察官	50名	47名	53名	51名	53名
教員	7名	6名	2名	5名	1名
刑務官	3名	3名	3名	3名	5名
会社員	2名	4名	2名	4名	2名
学生	2名	3名	3名	—	1名
非常勤講師	—	1名	—	—	—
大学院	—	—	1名	—	—
医師	—	—	—	1名	—
団体職員	—	—	—	—	2名
合計	64名	64名	64名	64名	64名

(図3 全日本剣道選手権大会出場者職業別内訳：全日本剣道連盟 HP より筆者作成)

64名の出場者の中で先ほど述べたように警察官が一番多く、教員・刑務官などが一桁で続く状態である。剣道という競技がスポーツではなく武道であるという点と深く関連しているのであるが、剣道にはプロが存在しない。警察官も教員も、その他の職業の方々も日頃はそれぞれの仕事があり、その中で時間を作って剣道に励んでいる。スポンサーが付き資金が提供される中で、その競技中心の生活をするという者は基本的に存在しない。つまり、競技の道具に使える予算が恐らくほかの競技のトップ選手に比べて低い。しかも竹刀は消耗品である。安さを重視する剣士を生んでしまいがちな構造が存在しているのだ。

<sup>2</sup> 全日本剣道連盟 HP 第64回全日本剣道選手権大会 出場選手内訳  
(<http://www.kendo.or.jp/competition/champ/64th/news/6061.html>)

### 3-2. 後継者の不足

ここでは竹刀職人が抱えるもう一つの問題、「後継者の不足」についてⅠ.弟子を採る余裕のなさ、Ⅱ.不安定な収入、Ⅲ.職人の認知率の低下、の3つに分けて詳しく見ていく。

#### Ⅰ.弟子を採る余裕のなさ

竹刀職人とは一朝一夕で生まれるものではない。元来、親方のものに弟子入りをして十数年に渡って修行を積む中で、少しずつ技術を盗み成長してようやく一人前となり独立して伝統が引き継がれていく仕組みであった。

しかし、職人からすると弟子を採るのには彼らが独立するまで養う金銭面での余裕と、彼らに指示を出したり教えたりする時間面での余裕が必要である。海外産機械製竹刀の流通によってそれらの余裕を持つ職人は減少してしまった。彼らは受け継がれてきた伝統を次の世代に伝えるという使命と、自分自身が竹刀職人として送っていく生活に板挟みになってしまったのである。

#### Ⅱ.不安定な収入

もう一つ、後継者の不足につながっているのが海外産機械製竹刀に需要を奪われたことによる収入の不安定化である。それに伴い竹刀職人の収入面での魅力が低下してしまい、弟子を志願する母数そのものが減少したと考えられる。Ⅰで述べたように弟子を募集する職人が少なくなっただけでなく、弟子入りする者の数も少なくなったのだ。

#### Ⅲ.職人の認知率の低下

最後の要因が「職人の認知率の低下」である。現在、職人の数は僅か10名前後で、彼らが生産する竹刀をすべて合わせても流通している竹刀の1%にも満たないと言われている。<sup>3</sup>このような状況で、特に最近の若者の剣士の多くは海外産機械製竹刀しか使ったことがない。弟子入りするしない以前に職人たちの作品を知らない、さらに職人たちの存在を知らないということすらあるのだ。大きな大会があると、その会場入り口のホールで匠の技を披露して若い剣士への認知を上昇させようと努める職人の方もいるという。後継者不足を解消するためには彼らの存在への認知度も上げていかなければならない。

---

<sup>3</sup> 西日本新聞 HP スポーツ  
([http://www.nishinippon.co.jp/nsp/kendo/gyoku2008/news/20080729/20080729\\_0010.shtml](http://www.nishinippon.co.jp/nsp/kendo/gyoku2008/news/20080729/20080729_0010.shtml))

## 第四章 現状の対策及び問題意識

第三章で説明したような問題を抱えている竹刀職人。本章では現在行われている対策とそこから著者が感じた問題意識を説明していく。

### 4-1. 全日本武道具協同組合とその対策

#### ① 全日本武道具協同組合とは

全日本武道具協同組合とは、約150数社にわたる全国の武道具製作メーカーや職人、材料屋、小売店からなる団体である。その目的は、より良い武道具用品を提供することにより、日本の伝統である武道の安全で健全な発展に寄与することである。主として挙げられる活動は、武道具用品の技術の伝承と開発研究、協同での製造や販売、広報活動、武道普及活動などと多岐にわたっている。

#### ② 全日本武道具協同組合の取り組み例

全日本武道具協同組合が昨今行った代表的な事業が、「SSPシール」事業である。SSPとは、Sinai Safety Promotionの略称であり、稽古や試合中における竹刀の事故を未然に防げるように安全基準を満たした竹刀に「SSPシール」を張っていくものである。これによって規格外竹刀の排除や竹刀の品質向上だけではなく、剣士の武道具安全意識の向上も望むことができる。

検査に合格した竹刀は貼付されているシールの記載番号から、いつ・どこで製造された竹刀かわかるようになっているなど、様々な工夫がなされている。

#### ③ 全日本武道具協同組合の対策

全日本武道具協同組合としては竹刀職人の技術と、そこから生まれる手作り竹刀は紛れもない伝統だと感じている。国に対して伝統工芸品としての指定や、経済的援助などを働きかけているが、様々な業界で伝統を持つ職人が安価に生産できる機械に悩まされるという構造が生まれている中で、そのような援助を受けるのはなかなか難しいところがあると言う。全日本武道具協同組合としても単に経済的な援助を行っても根本的な解決には繋がらない、それ自体が商売として成り立っていかなければならないという考えがあり、安易な経済的援助は行わずに名工の表彰など非経済的な援助に対策を留めている。<sup>4</sup>

### 4-2. 問題意識

上記の全日本武道具協同組合の対策を受けて、筆者が独自に感じた問題意識を説明して

---

<sup>4</sup> 全日本武道具協同組合 ヒアリング調査より

いきたい。

まず先ほど示した「図2 剣道職人が抱える問題」の最右列の五つの要因について、筆者なりにもう一度検討していきたい。

#### ① 海外産機械製竹刀の流通

竹刀職人が厳しい状況に陥った原因の最も根幹にあるのがこの問題だ。しかし、それ自体を是正する必要があるとは考えない。なぜなら、海外産機械製竹刀は確かに職人から竹刀需要を奪ったのであるが、それはもっと安く竹刀を手に入れたいという確かなニーズがあったからである。特に練習量が多く、大人に比べて予算が低い若年層の剣士の活動を支えていると言えるのではないだろうか。

#### ② 竹刀にこだわりを持つ剣士の減少

この点に関しては難しいところがある。手作り竹刀を使ったことがある上で、品質よりも価格を重視して海外産機械製を選ぶのであれば、ある意味しょうがない部分がある。しかし、海外産機械製竹刀しか使ったことがない剣士が手作り竹刀の品質を体験せずに機械製の竹刀を使い続けているとしたら、それは改善されるべきである。

#### ③ 現役職人に弟子を採る余裕がない

確かに問題ではあるが、二次的に解決されていくべきものだと考えている。海外産機械製竹刀に竹刀需要を奪われている状況で無理やり弟子を増やしても供給過多につながってしまう。そうすれば剣道職人の多くの生活は今以上に立ち行かなくなってしまう。望ましい道は手作り竹刀の存在や品質をまず知ってもらい、竹刀需要を海外産機械製竹刀から少しでも取り戻すことである。その上で必要に応じて職人が弟子を募集して行くべきだと考えている。

#### ④ 不安定な収入

これも「③現役職人に弟子を採る余裕がない」と同じである。全日本武道具協同組合でも言われているように、今の状況で単に経済的な援助を行っても根本的な解決にはつながらない。それ自体が商売として成り立つようにならなければ本当の意味で解決したとは言えない。そのためには手作り竹刀への竹刀需要を少しでも回復させることで、収益力を高めていくしかない。

#### ⑤ 竹刀職人の認知率が低い

この点こそ、改善されるべきだと考えている。竹刀職人を認知していない剣士の中に潜在的な手作り竹刀への需要があるのだ。この需要を呼び起こすことによって「②竹刀にこだわりを持つ剣士の減少」、「③現役職人に弟子を採る余裕がない」、「④不安

定な収入」を本当の意味で解決していきたい。

上記の①～⑤の分析をもとに著者の問題意識をまとめる。

まず海外産機械製竹刀の流通に対して問題があるとは考えない。品質は手作りの竹刀よりも低いというのは否めないが竹刀としての基準を満たしており決して粗悪品ではない。むしろ手軽な価格で竹刀を手に入れたいたいという剣士のニーズを満たしてきており、剣道の普及を支えてきたとも言える。

そして、竹刀職人の収益面の問題やそれに伴い弟子を採る余裕がないという問題。確かに解決していかなければならないが、単に補助金など経済的な援助をしても根本的な解決にはつながらない。手作り竹刀への需要を取り戻すことができれば自然と解消していく問題だと考える。

一番の問題が、手作りの竹刀を知らない人がいること、また経験せずに海外産機械製竹刀を使い続けている人がいることである。そういった剣士の中に手作り竹刀への潜在需要が隠れている。その需要を呼び起こすような打開策を考案して、竹刀職人が抱える問題の根本的な解決を目指していきたい。

## 第五章 政策提言

本章では、第四章で説明した問題意識をもとにそれらを解決できるような独自の政策を考案し、説明していきたい。

### 5-1. 海外産機械製竹刀と手作り竹刀の比較

ここでは、政策を考案するにあたって海外産機械製竹刀と手作り竹刀の長所と短所を比較していく。(下記図4参照)

## 海外産機械製竹刀と手作り竹刀の比較

	海外産機械製竹刀	手作り竹刀
長所	<ul style="list-style-type: none"><li>・価格が安い</li><li>・(安価で修理が可能)</li></ul>	<ul style="list-style-type: none"><li>・品質が高い</li><li>・安価で修理が可能</li></ul>
短所	<ul style="list-style-type: none"><li>・品質が低い</li></ul>	<ul style="list-style-type: none"><li>・価格が高い</li></ul>

(図4 海外産機械製竹刀と手作り竹刀の比較：筆者作成)

まずは手作り竹刀から見ていきたい。長所はやはり国産真竹を使い、職人の目で竹の繊維を見極めて削っていることから品質が高いことである。そしてこれは職人の方から直接竹刀を購入しているものに限られるかもしれないが、安い価格(1000円程度)で修理が可能なことである。それに対して短所は、やはり一本一本手をかけて作る分価格が高くなってしまうことである(一本当たり10000円程度)。

続いて海外産機械製竹刀について見ていこう。長所は機械を使っているため大量生産が可能で価格が安いところである。そうは言っても原料は海外産の桂竹の場合も国産の真竹の場合もあり、値段はピンキリである(一般的に2000円~6000円程で手作り竹刀の価格を超えることはない)。そして海外産機械製竹刀も剣道具用品店に持って行けば修理が可能である。しかし、職人の方が自分で作った竹刀を修理するのと、機械で作った竹刀を剣道具用品店の方が修理するのではやはり修理の幅が異なる。また海外産機械製竹刀に関し

て、もともとの価格が手作りの竹刀に比べて大幅に安いので、費用を払って修理するくらいなら自分でできるだけ手入れをした後、新しいものに買い替えてしまう人が多い。そして海外産機械製竹刀の短所は、機械によって一律的に削られてしまうため手作りの竹刀に比べると品質が低くなってしまうことである。

政策を考えるにあたって、手作りの竹刀が高品質なのはもちろん、幅の広い修理が可能であり長期的に見ると価格の面でも機械製の竹刀を凌ぐことができるのではないかと考えた。この点に関してもう少し詳しく追及していきたい。

## 5-2. 手作り竹刀が機械製竹刀を価格面で凌ぐ可能性

ここでは、先ほど説明した長期的に見ると価格面で手作り竹刀が機械製竹刀を凌ぐ可能性について試算しながら検討していきたい。そこでまず下記のような前提を考えた。

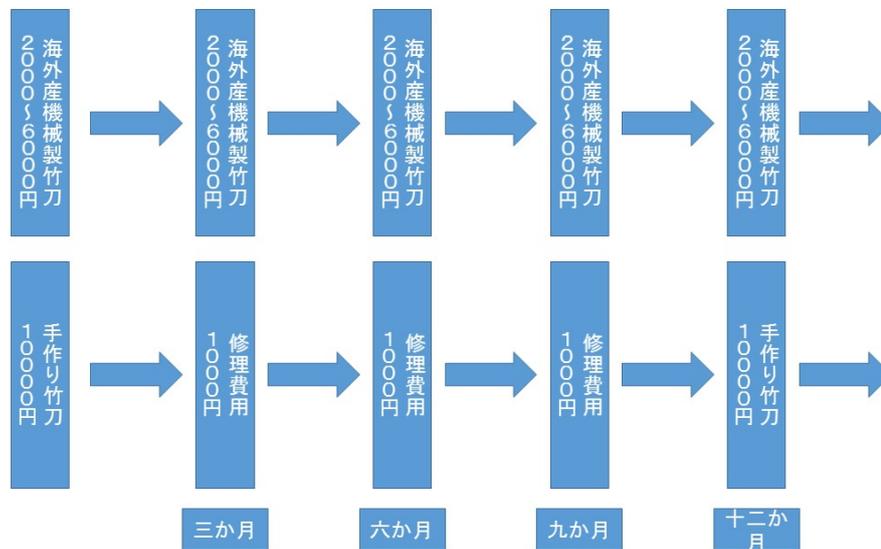
<前提>

- ・とある剣士が海外産機械製竹刀と職人による手作り竹刀のどちらを購入するか検討している。
- ・海外産機械製竹刀の価格は1本2000円から6000円、消耗品であり三か月に一回交換しなければならない。
- ・手作り竹刀の価格は1本10000円、こちらも消耗品だが、三か月に一回修理をすることで使い続けることができる。修理費用は1回1000円で、1本の竹刀につき修理は3回まで行うことができる。

ここで、竹刀の交換・修理頻度を三か月に一回としたのは著者の体感ベースで平均的な竹刀の交換・修理の頻度がそのようであったからである。しかし、練習の頻度や練習内容、剣道のスタイルによって個人個人異なるところである。

続いて手作り竹刀の修理の回数を3回までとしたのは、一回の修理につき一枚の竹片を交換すると考えたときに、4回交換すると元々の竹片がなくなってしまうからである。

そしてこの前提で海外産機械製竹刀と手作り竹刀を購入したモデルを図解すると以下の図5のようになる。



(図5 試算：筆者作成)

図5からすると手作り竹刀を選択したときにかかる費用は一年で、

$$10000(\text{手作り竹刀代}) + 1000 \times 3(\text{修理費用3回分}) = 13000 \text{ 円}$$

となる。これに対して海外産機械製竹刀を選択した場合、一年で4本の竹刀を購入する必要がある。つまり、

$$13000 \div 4 = 3250 \text{ 円}$$

より、一年でかかる費用は

3250円未満の機械製竹刀 < 10000円の手作り竹刀 < 3250円より高い機械製竹刀となる。

よって、この剣士が価格だけで判断する場合、手作り竹刀は一部の海外産機械製竹刀よりも長期的に見れば競争力を持つことになるのである。また、剣士が品質を重視すればするほど、手作り竹刀はより競争力を持つ。

### 5-3. 広報活動

先ほどの試算で、長期的な目線を持つと手作りの竹刀は一部の海外産機械製竹刀を価格の面においても凌ぐ可能性があることが分かった。問題は第四章でも述べたようにどのようにしてそれを伝えていくかである。筆者は①剣道具用品店でのパンフレット配布と②手作り竹刀へのシール貼付を考えた。ここではそれらを順に説明していきたい。

#### ① 剣道具用品店でのパンフレット配布

いかにして手作り竹刀が海外産機械製竹刀を価格面で凌ぐ可能性や、竹刀職人の

方々の現状を伝えていくのか。初めに考案したのが剣道具用品店でのパンフレット配布である。この政策を行う主体としては第四章で説明した全日本武道具協同組合が好ましい。その理由は二つ。

一つ目は全日本武道具協同組合の構成や理念がこの政策を行う上で非常に適しているからだ。この団体に加盟している武道具製作メーカー、職人、材料屋、小売店は、北は北海道から南は鹿児島まで約150あり、ほぼ全国的な波及効果を持っている。そして武道具の品質向上や伝統の保護を掲げている点で竹刀職人や手作り竹刀のことを伝えていくのにふさわしい存在と言える。

二つ目に第四章においても説明した「SSP シール」事業に代表されるような行動力や新たな事業を行う上での前例を有している点である。

政策の詳しい内容について。これまで説明してきたような竹刀職人が抱える現状や、手作りの竹刀が海外産機械製竹刀を価格面においても凌ぐ可能性についてのパンフレットを作成する。そして、加盟している小売店のうち職人が在籍している、または職人による手作り竹刀を取り扱っている店舗においてパンフレットの配布、必要に応じて説明を行う。

## ② 手作り竹刀へのシール貼付

この政策を行う主体も「①剣道具用品店でのパンフレット配布」と同じ理由で、全日本武道具協同組合が好ましいと考える。特にこの政策は「SSP シール」をモデルとしている点でなおさらである。

政策の詳しい内容について、まず手作り竹刀であることを示すようなシールを考案する。それを全日本武道具協同組合に加盟している団体が扱う手作り竹刀に貼付していく、というものだ。

このシール貼付に期待する効果は大きく二つ存在する。まず、手作り竹刀を知らない剣士への広報効果である。見慣れないシールが貼ってあることから手作り竹刀を知ってもらい、そして剣士同士のコミュニケーションの中で手作り竹刀の品質を体験してもらい、そのことを見込んでいる。もう一つが、このシールが貼られている竹刀を使う剣士が竹刀にこだわっていることや竹刀伝統の保護に協力していることをアピールできる点である。

## 5-4. アンケートを通じた政策の有効性の検証

ここでは、実際に剣道を嗜むものに対してアンケートを行うことで、この政策の有効性を検証していきたい。以下の図6が質問項目、図7が結果である。

質問 1	使用している竹刀の平均的な値段を教えてください。 ・ ~1999 円    ・ 2000~2999 円    ・ 3000~3999 円    ・ 4000~4999 円    ・ 5000
------	--

	円以上
質問 2	一年間に何本の竹刀を購入しますか。 ・0本 ・1本 ・2本 ・3本 ・4本 ・5本以上
質問 3	練習の平均的な頻度を教えてください。 ・週に1回未満 ・週に1~2回 ・週に3~4回 ・週に5回以上
質問 4	竹刀を購入するに際して、重視する価格と品質の比重を教えてください。 ・価格10：品質0 ・価格9：品質1 ・価格8：品質2 ・価格7：品質3 ・価格6：品質4 ・価格5：品質5 ・価格4：品質6 ・価格3：品質7 ・価格2：品質8 ・価格1：品質9 ・価格0：品質10
質問 5	使い切りの3000円の竹刀と、1000円で3回まで修理可能な9000円の竹刀があるとします。(竹刀はどちらも3か月で故障するとします。しかし、9000円の竹刀は修理することでまた3か月使うことができます。)どちらの竹刀がより魅力的ですか。 ・3000円の竹刀 ・9000円の竹刀

(図6 質問内容：筆者作成)

上記のアンケートを行い、9人の大学生の剣道を嗜む方々から回答をいただいた。それらを集計したものが下の図7である。

質問 1	・~1999円・・・1人 ・2000円~2999円・・・3人 ・3000~3999円・・・5人 ・4000円~4999円・・・0人 ・5000円以上・・・0人
質問 2	・0本・・・0人 ・1本・・・1人 ・2本・・・4人 ・3本・・・2人 ・4本・・・1人 ・5本以上・・・1人
質問 3	・週に1回未満・・・0人 ・週に1~2回・・・2人 ・週に3~4回・・・7人 ・週に5回以上・・・0人
質問 4	・価格10：品質0・・・2人 ・価格9：品質1・・・0人 ・価格8：品質2・・・1人 ・価格7：品質3・・・3人 ・価格6：品質4・・・2人 ・価格5：品質5・・・0人 ・価格4：品質6・・・1人 ・価格3：品質7・・・0人 ・価格2：品質8・・・人 ・価格1：品質9・・・0人 ・価格0：品質10・・・0人
質問 5	・3000円の竹刀・・・7人 ・9000円の竹刀・・・2人

(図7 結果：筆者作成)

それぞれの質問の意図と結果の分析を行っていきたい。

まずは質問1、剣道を嗜む者が実際にどれくらいの価格帯の竹刀を使っているのかを知

るのが質問の意図である。結果的に 2000～3999 円に 9 人中 8 人が収まる結果となった。概ね予想通りであり、この価格帯の竹刀を購入する者であれば長期的に見て手作り竹刀を購入した方が価格面でも得になる確率は十分に考えられる。

続いて質問 2、剣士が実際に一年で何本の竹刀を購入するのかを知るための質問。「5-2. 手作り竹刀が機械製竹刀を価格面で凌ぐ可能性」では、一年で 4 本の竹刀を購入すると考えた。結果を見ると、偏りはあるものの、平均をとると約 2.67 本となる(5 本以上は 5 本として算出)。5-2 の前提よりも少なめの数字となったが、その分手作り竹刀を選んだ時に修理に出す頻度も少なくなると考えられるので、政策の有効性に大きな影響はない。

次は質問 3、剣士の練習頻度を調べる質問だ。結果を見ると週に 3～4 回がほとんどである。高校生や体育会の学生、警察官などの方々の頻度はもっと高いと考えられる一方で、趣味で剣道を嗜む大人などの方々はもっと少ないと思われる。頻度が高ければ「質問 2」の一年間で購入する竹刀の本数ももっと多くなるだろう。

質問 4 は、竹刀の価格と品質を重視する比重に関する質問。5-2 では価格面のみに絞って考えたが、ここで品質を重視する比重が高ければ高いほど政策の有効性は高くなると考えられる。結果はアンケートに回答してくださった剣士のほとんどが品質よりも価格を重視していた。特に「価格 10：品質 0」を選んだ方が 2 名もいたことには目を引かれた。海外産機械製竹刀が支持を拡大してきたことが頷ける結果である。

最後に質問 5。3000 円の竹刀は海外産機械製竹刀を、9000 円の竹刀は手作りの竹刀を想定しており、実際にどちらの方が魅力的なのかを調査する質問である。この質問には 2 つのポイントがある。まず一つ目が、一年間を一つのサイクルとしてかかる値段はどちらも同じになる(12000 円)ように設定したことである。価格の面での価値を同じにした時、どちらが選ばれるのかを調べたい。二つ目のポイントが 3000 円の竹刀と、9000 円の竹刀の品質の差を明記しなかったことである。実際に手作り竹刀を経験したことない人に対して、海外産機械製竹刀との違いを口で説明するのは難しい。ここでは品質のことも明記せず、長期的に見た価格も同じとした時にどちらが選ばれるのかを調査することを質問意図とした。結果を見ると 3000 円の竹刀を選んだ方が 7 人いたのに対して、9000 円の竹刀を選んだ方は 2 名に留まった。海外産機械製竹刀を使い続けている剣士にとって修理という考えがあまり馴染みのないことや、竹刀の消耗品という性質上安いものでもいいから多くの本数を所持しておきたいという考えがあったことが伺える。徹底した広報活動によって、「修理して長い間使い続ける竹刀」という考えを再び浸透させていく必要があると感じた。

最後にそれぞれの質問に対する分析をまとめる。やはり学生剣士に注目すると品質よりも安さを重視する者が大半を占めるようである。しかし実際に購入している竹刀の価格は 2000～3999 円が多く、長期的な目線を持てば手作りの竹刀でも十分に価格面で競争できるということが分かった。それ以上の問題が、質問 5 の結果から分かるように価格面での長

期的な価値が同じだと「3000 円の竹刀」をより魅力的に感じてしまう剣士が多いことである。竹刀は消耗品であることに加えて競技の性質上、手入れを適切に行っても突然竹刀が壊れてしまうことは往々にして存在する。よって、剣士は常に複数本の竹刀を所持しておく必要であることから本体価格が安い方の竹刀が支持されがちであることが要因として考えられる。また、海外産機械製竹刀を使い続けてきた剣士にとっては「修理して長い間使い続ける竹刀」に対する馴染みが薄いことも考えられる。まずはこの問題を地道な広報活動によって解消していくことが重要であると感じた。

## 終章

本論文では、竹刀職人と、その伝統・技術を守っていくことを目的として、主に聞き取り調査を通じて竹刀職人が置かれている現状を分析し、その上で考案した打開策をアンケート調査によって有効性を検証した。ここではその調査と分析、検証から得られたことを述べる。

まず、竹刀職人が置かれている現状について。彼らは安価な海外産機械製竹刀の流通を発端として、「収益性の低下」や「後継者の不足」など複雑に絡み合った様々な問題を抱えることとなった。その結果として、現役の竹刀職人は全国で10名前後、彼らで作る竹刀の本数は流通する竹刀の本数の1%に届くかも分からないという状況にまで陥ってしまった。

このような状況にある竹刀職人に対して、単に経済的な援助を行っても根本的な解決にはつながらない、また結局はそれ自体で商売を成り立たせていかなければならない、という観点から経済的な援助は行われていない。現状の対策は名工の表彰など、非経済的なものに留めているということも分かった。

しかし、彼らが確固たる技術を持っていることは明らかである。そしてその技術に誇りを持ち、ネット通販が流行りはじめる中でも自分で手に取って道具を選ぶ剣士を求めているのだ。安さや便利さだけを追求する剣士を見て、竹刀職人の方々は悲しんでいる。

上記のような現状や職人の方の思いを知り、筆者は手作り竹刀が安価に修理可能という点に着目して打開策を考案した。具体的には「長期的に見ると手作り竹刀が海外産機械製竹刀を価格面で凌ぐ可能性」を検証して、一定の条件の下でそれが成り立つことを発見した。そして、その事実を「剣道具用品店でのパンフレット配布」と「手作り竹刀へのシール配布」を通じて訴えていくという政策である。

もしかすると価格面から訴えていくという手法は職人の方の意見とはそぐわないかもしれない。しかし、手作りの竹刀を体験したことが少なく、価格を重視する剣士が多い現状がある。よって、まず価格の面から手作り竹刀をアピールしてまずは手に取ってもらう。その結果として手作り竹刀の品質が剣士に伝わっていく、というやり方が現実的で有効だと考えた。

そして、最後にこの政策の有効性を検証するためにアンケート調査を行い、大学生の剣士から回答を得た。学生の剣士は竹刀を購入する際に安さを重視する傾向にあるものの、長期的な目線で見れば手作り竹刀でも十分に価格面で競争できることが分かった。しかし竹刀や剣道という競技の特性上、本体価格が重視されがちであるという事実が判明したことや、社会人をはじめとする他の年代へのアンケート調査も行う必要があることなど、本論文はいくつかの課題を残している。

兎に角、竹刀職人の方々が置かれている状況を打破し、伝統や技術を守っていくためには数多くの剣士が彼らのことを深く知り、手作りの竹刀を体験することが何よりも重要であ

ると同時に、この問題を解決する鍵となっていると言えるのではないか。

## 参考文献

### 調査協力(順不同)

- 全日本武道具協同組合 森様
- 全日本剣道連盟 岩坂様
- 西野竹刀製作所 西野様
- アンケートにご協力いただいた皆様

### 論文

- 横地浩紀(2012)「武道における再現性に関する一考察」『武道学研究』Vol. 45 (2012-2013) No. Supplement p. 60
- 中村民雄, 百鬼史訓, 森下捷三, 大保木輝雄(2013)「あらためて、剣道具を考える」『武道学研究』Vol. 45 (2012-2013) No. 3 p. 242-257
- 角山幸洋(2005)「有馬竹細工の盛衰(補遺)」関西大学『経済論集』第55巻第2号(2005年9月)
- 大石純子(2016)「国際開発における剣道の現状と可能性」『筑波大学体育系紀要』第39巻第1-12号(2016-03)

### 書籍

- 吉田秀明(2006)「ものづくり・ひとづくりー現場力がひらく企業の未来ー」法律文化社

### その他

- 「知っていますか草加のものづくり」、草加市 HP  
(最終検索日：2017年1月19日)  
<<http://www.city.soka.saitama.jp/shimin/koho/h23/1099/01/01.html>>
- 「製作工程」、江戸川防具 HP  
(最終検索日：2017年1月19日)  
<[http://www.edogawa-bougu.com/manuf/frame\\_manufacture.html](http://www.edogawa-bougu.com/manuf/frame_manufacture.html)>

- 全日本剣道連盟 HP  
(最終検索日：2017年1月20日)  
<<http://www.kendo.or.jp/>>
- 全日本武道具協同組合 HP  
(最終検索日：2017年2月1日)  
<<http://zenbukyo.jp/>>
- 「玉竜旗 「竹刀職人」会場で技披露 武道の精神伝承 この道一筋32年 大橋さん」、西日本新聞 HP  
(最終検索日：2017年2月1日)  
<[http://www.nishinippon.co.jp/nsp/kendo/gyoku2008/news/20080729/20080729\\_0010.shtml](http://www.nishinippon.co.jp/nsp/kendo/gyoku2008/news/20080729/20080729_0010.shtml)>

## あとがき

自分が好きなものを題材に卒業論文を執筆したい、という思いからこの論文ははじまりました。私は小学生の頃から細く長くではありますが、剣道が続けてきました。幼い頃に滞在していた香港という異国の地で初めて竹刀を握ってから、私はどんどん剣道の魅力を知り、のめりこんでいきました。決して強いわけではない、稽古は辛い、それでも剣を交えて多くの尊敬する方々や仲間と出会える剣道は私にとってかけがえのないものです。

その一方で私は日本と香港の環境に対する意識の違いなどから環境経済学に興味をもち、大沼ゼミに入ることを決意しました。二年間のゼミ活動を振り返ると、先生や先輩方、同期の仲間に助けてもらう機会が非常に多く、自分の非力さを痛感するばかりでした。しかし、長い時間をかけて自分で選んだ分野を勉強できたこの二年間もまた私にとってかけがえのないものであります。そんなゼミ活動の集大成として剣道には欠かせない竹刀を題材に論文を執筆できることは、私にとって大きな喜びでした。お忙しい中でもご丁寧に対応してくださった全日本武道具協同組合の森様、全日本剣道連盟の岩坂様、西野竹刀製作所の西野様、そしてアンケート調査にご協力いただいた皆様に深く御礼申し上げます。

最後になりますが、二年間にわたってご指導いただいた大沼先生、大学院生・12期の先輩方、同期の仲間に心から感謝を申し上げます。